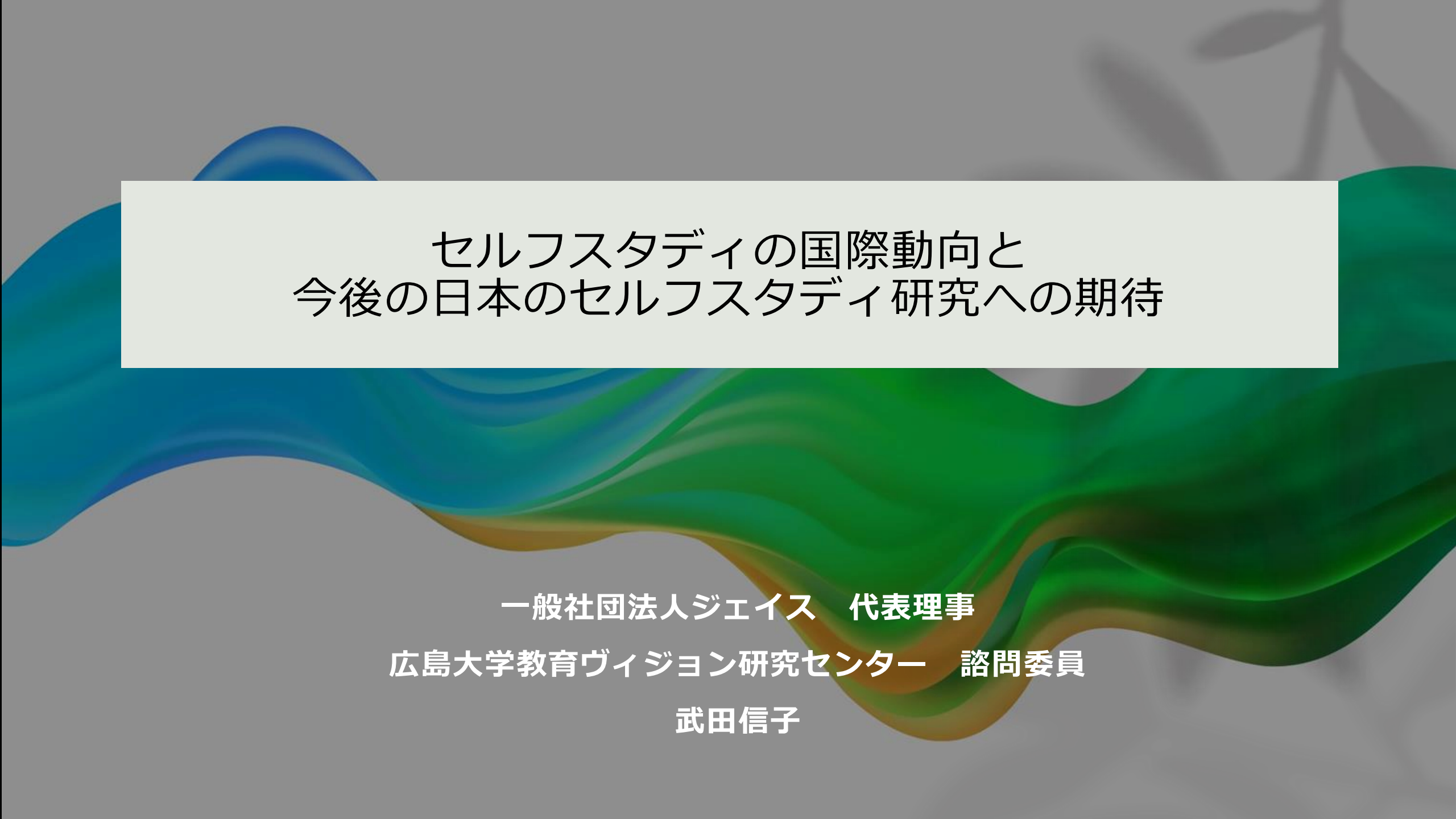




セルフスタディの国際動向と 今後の日本のセルフスタディ研究への期待

一般社団法人ジェイス 代表理事

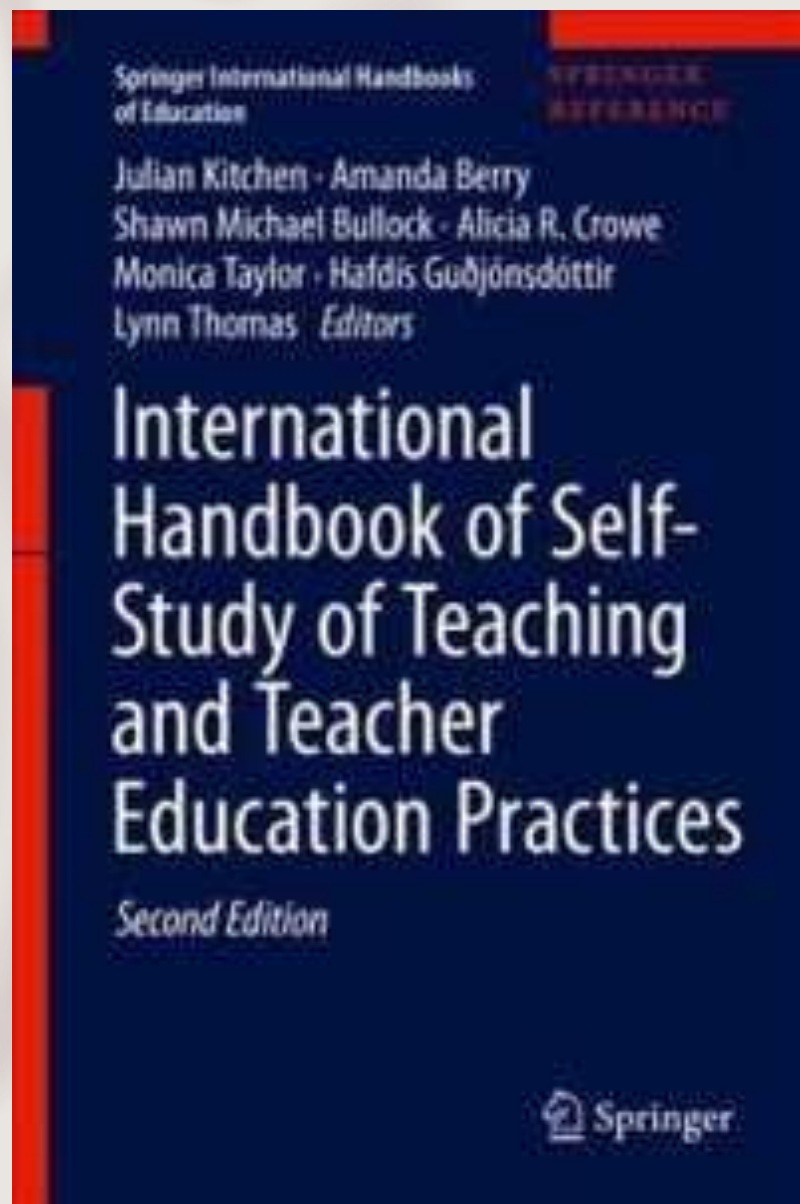
広島大学教育ヴィジョン研究センター 諮問委員

武田信子

国際動向と7つの問い

0．国際動向概観

- 1．日本に教師教育の国際動向、セルフスタディに詳しい研究者はいるのか。
- 2．日本ではなぜ、国際的な文脈で教師教育を語れずに来たのか。
- 3．日本の教師教育は欧米と「異なっているのか」「遅れているのか」。
- 4．なぜ、教師教育の国際動向から学ぶ必要があるのか。
- 5．比較教師教育の視点の必要性。
- 6．セルフスタディの紹介に取り組むことの意義は何か。
- 7．これからの日本のセルフスタディ研究とセルフスタディ実践。



教育と教師教育実践のセルフスタディ 国際ハンドブック（第2版・全2巻）

(Springer International Handbooks of Education)
Kitchen, Julian (EDT)/ Berry, Amanda (EDT)/
Gujnsdttir, Hafds (EDT)/ B

2004年初版⇒2020年第二版。

教育実践、教師教育実践のセルフスタディ研究に
おける英語圏の広範な包括レビュー。

今後20年間のビジョンを提示。

- (1)セルフスタディの基礎
- (2)セルフスタディの手法と方法論
- (3)社会正義のためのセルフスタディと教育・教師教育
- (4)教科の枠を超えたセルフスタディ
- (5)教師教育とその先のセルフスタディ
- (6)文化と言語を超えたセルフスタディ

翻訳については仮訳ですので、必ず原文をご確認ください。

セクション1：セルフスタディの基礎

- S-STTEP：関わりの入り口に立つ
- セルフスタディ研究の歴史と発展、キャッスルカンファレンスを通して
- セルフスタディ研究の理論のルーツ
- S-STTEP研究者になる際の立ち位置、アイデンティティとポジション
- 誰が、なぜ、セルフスタディをするのか
- 教師教育者の知識と実践とS-STTEP研究
- セルフスタディと教育政策

セクション2：セルフスタディの手法と方法論

- セルフスタディの方法論の難しさの操縦
- ハイブリッドな方法論としてのセルフスタディ
- どこから始めればいいのか？セルフスタディのエントリーポイント
- セルフスタディの方法とツール
 - どこで終わるのか？セルフスタディの形式と表現
- 自己研鑽の倫理的考察
 - セルフスタディの方法論への挑戦とセルフスタディからの挑戦

セクション3： 社会正義のためのセルフスタディと教育・教師教育

- フェミニストのセルフスタディを通して、社会的に公正な教師教育のスタンスを明らかにする
- クィア・アイデンティティ、人種と教師教育 ・ 人種、障害と教師教育
- セルフスタディによる白人男性教師教育者の権威の破壊
- インクルーシブ教師教育の教育学 ・ 社会正義教師教育のための被抑圧者の演劇
- 多様な環境でのSJ教師教育 ・ 社会活動のための教師教育
- 子ども時代の性的虐待についての意識の向上に際してセルフスタディを活用したSJ教育の強化

セクション4：教科の枠を超えたセルフスタディ

- 教師教育の教科横断的なセルフスタディ ・ 数学教師教育のセルフスタディ
- 識字・言語芸術の教師教育：教師教育実践のセルフスタディから意味を見いだす
- 科学教師教育 ・ 保健体育のセルフスタディ
- 教師教育におけるテクノロジーとオンライン学習のセルフスタディ
- 他言語の生徒に英語を教える際のセルフスタディ

セクション5：教育のセルフスタディ、教師教育、そしてその先へ

- ・ セルフスタディを通じた教師教育学の実践
- ・ 模範的なプログラムにおける教師教育のペダゴジー
- ・ 初等・中等教育におけるセルフスタディ
- ・ 高等教育におけるセルフスタディとリーダーシップ
- ・ セルフスタディと教育指導
- ・ 教育実習・現場体験におけるセルフスタディ
- ・ ポートフォリオとセルフスタディ
- ・ 教職課程におけるセルフスタディの課題
- ・ 基礎コースとセルフスタディ

セクション6：文化と言語を超えたセルフスタディ

- ・ アジアにおけるセルフスタディ、特に韓国を中心に
- ・ 大学や学界での挑戦的で興味深い文化
- ・ ラテンアメリカの文化と言語の文脈における教師教育研究のセルフスタディの展開
- ・ セルフスタディを利用した実践的研究へのヨーロッパのアプローチ
- ・ 母国語と異なる言語でセルフスタディを行い、それが最終的に興味を持たれたこと
- ・ セルフスタディを特定の文化に合わせて行った同僚との共同作業
- ・ 南アフリカでのセルフスタディ
- ・ 特定の政治情勢の中で仕事をし、その中で自分のアイデンティティを定義するために自己研鑽したこと
- ・ セルフスタディの研究者がセルフスタディを行い、他者に協力してもらうために創造性を発揮したこと
- ・ 異言語や異文化の中でのセルフスタディ、国を超えた共同作業、文化的境界の探求

S-STEPウェビナー

• <https://youtu.be/ZaFNfHz2sVw>



A map of Europe with several countries circled. Red circles highlight Iceland, Ireland, the United Kingdom, and the Netherlands. Blue circles highlight Norway, Sweden, Finland, Estonia, Latvia, Lithuania, Poland, Czechia, Slovakia, Austria, Hungary, Romania, Bulgaria, Greece, and Turkey. Other countries shown include Denmark, Germany, France, Italy, Spain, Portugal, and Ukraine.



Elizabeth White
Joy Jarvis

Hafþís
Guðjónsdóttir

Ann MacPhail,
Mary O'Sullivan

Mieke
Lunenberg

We encourage you to tweet during today's webinar! Be sure to tag us: @sstepsig

BRIDGING JAPAN AND S-STEP WITH MY HYBRIDITY



アメリカ教育学会のSIGから始まったキャッスルカンファレンス@イングランド

The Self-Study of Teacher Education Practices (S-STEP) International Biennial Conference

Sunday, August 7, 2022 – Friday,
August 12, 2022

Herstmonceux Castle, East Sussex,
England

Pausing at the Threshold:
Opportunity Through, With, and For
Self-Study of Teacher Education
Practices



キャッスルカンファレンスの歩み

- 1 (1996) 教師教育の未来のエンパワー
- 2 (1998) コミュニティの会話
- 3 (2000) 教師教育の神話とレジェンドの探索
- 4 (2002) セルフスタディを通じた教師教育の変革
- 5 (2004) 協働とコミュニティ：セルフスタディを通じた境界越え
- 6 (2006) 希望への旅：多様な世界におけるセルフスタディのリスクを超えて
- 7 (2008) 教師教育改革への道：対話、多様性とセルフスタディ
- 8 (2010) 公と私の間で：教師教育の多様な状況への対応。
- 9 (2012) 探究するコミュニティの拡張：セルフスタディを通じた教師教育の照射。
- 10 (2014) 時代の変化に合わせた実践の変革：セルフスタディ研究の過去・現在
未来の可能性。
- 11 (2016) プロフェッショナルな探究の方法論としてのセルフスタディ実践
- 12 (2018) 境界を押し広げ国境を越える：研究手段としてのセルフスタディ
- 13 (2020) 織られた布（テキスタイル）とその製品（タペストリー）：エドテックブックス。
- 14 (2022) 入口で立ち止まる：教師教育実践のセルフスタディのための
セルフスタディを通じた、セルフスタディと共にある機会

1. 日本にセルフスタディの国際動向に詳しい研究者はいるか。

- 武田（臨床心理学）の問題意識（学校教育現場の子どもたちの苦悩）と教師教育学の乖離
カナダ・オランダ滞在⇒ATEE参加⇒翻訳・紹介と招聘
今回、武田に課された課題…サクサク情報が読めない現実の中でどう問題提起していくか
- 広島大学EVRI、草原研究室の研究者たち ATEEの研究者との交流
- Alicia Crowe, Mieke Lunenberg,
- 広大 草原や武田らによる翻訳や招聘, チームビルディング（後述）
学会大会における講演やワークショップ
Fred Korthagen, Wim Westerman, Frank Jansma, Anya Swennen, Kari Smith
John Loughran, Samaras Anastasia etc.,
- アイスランド大学 Megumi Nishida, Edda Óskarsdóttir, Hafdís Guðjónsdóttir
- 韓国の場合

⇒依然、不十分

2. 日本ではなぜ、国際的な文脈で教師教育を語れずに来たのか。

- そもそも教師教育学という専門分野が存在しなかった。
- 教師教育者の専門性開発という発想が今もなお薄い。
- アカデミズムの中で実践的な教員養成は低い位置に置かれていた。
- 海外文献を原語で理解できない。
学会に参加してもディスカッションに加われない。
- 日本と欧米の教育システム、文化の違いを超えて教育の本質を議論できない。
- 比較教育学の「比較」のあり方。
- 学年歴の違いによる学会参加の困難さ。
- 自分の専門地域、専門分野のみの情報収集と発信 論文を書くための研究。
- 翻訳・紹介論文の珍重。海外研究帰国後の出羽守。
- 子どもたちのウェルビーイングの比較の必要性の認識不足。

3. 日本の教師教育は欧米と 「異なっているのか」「遅れているのか」。

- 人の育ちは同じだが…
- 教師は「尊師」である？！
- 人権教育が普及していない ⇒ 自己開示へのためらい
- それなりに成功してきた人材育成 ⇒ 抑圧された子どもたちの存在を認められない
- 言うことを聞く国民の育成
- 民主主義教育が普及していない
- 根本的な教育改革ができなかった
- 海外とは異なるから「できない」という判断
- 共通の言葉で語れないから新しい情報が入りにくい
- 異なっても遅れていても構わない・・・

問題は子どもがウェルビーイングに育つことを教育が保障しているかどうか

4. なぜ、教師教育の国際動向から学ぶ必要があるのか。

- 武田はなぜセルフスタディに着目したか。
- 理論と実践の乖離を解消する具体的方策の導入
- 教師教育者が自分をリフレクションする機会の創出
- 実践家が理論を一般化できる可能性の拡張
- コミュニティワーク（当事者主体とエンパワメント）
- + べてるの当事者研究 当事者＝学校教員・教師教育者
- 日本の優れた教育を現場の教員がまとめることが可能になる
⇒ヒエラルキーの変化を生む 教員のエンパワメント
- なぜ、ロックラン氏の招へいを思いついたか。
- 2010年頃のATEEでSwennen氏の強い推薦と話題性
- 日本において今後セルフスタディが果たしうる役割。

5. 比較教師教育の視点の必要性

- 日本教師教育学会 学会長・編集委員長へのメール
⇒教師教育研究ハンドブック（学文社）検討会の開始
- 海外教員養成やOECDの情報
- 米英独仏中中心の文科省調査
- スペイン語圏他、多様な他の地域からの情報の欠如
- 狭い地域、国家の情報の伝達・紹介に留まる傾向

2020教員養成とアカデミズム

2019開放制の教員養成を考える

2018教育学部の30年

2017「指標化」「基準化」の動向と課題

2016教師の育ちと仕事はどう変わるのか

2015教師教育研究の今日的課題を考える

2014教師教育の“高度化”を考える

2013教師教育の自律性

2012教師教育実践の検証と創造

2011教師教育学研究の課題と方法

2010教師教育政策の検証

2009教員の需給変動と「質保証」

2008教師教育改革の国際的動向

2007教員制度の改革と教師教育のゆくえ

2006岐路に立つ戦後教員養成

2005カリキュラム改革と教員研修

2004子ども・青年の現状と教師教育の課題

2003特色ある学校づくりと教師教育

2002教師教育と大学院の役割

2001教師教育の総括と21世紀の教師教育
を展望する－教師の資質能力を問う－

2000新制大学半世紀：「大学における教員
養成」の再検討

1999新免許法とこれからの教員養成

1998学校の問い直しと教師教育の課題

6. セルフスタディの紹介に取り組む意義は何か。

- チーム・ビルディング
- 大学教員 + 学校教育 + α のチーム
- 伝わる翻訳 ← 教員が可能な研究の模索 実践あつての教育
- 大学・大学院実践（教員養成） ⇔ 教員研修の橋渡し
- 誰かのもの ⇔ 恩師、権威 でない学問のありかた
- フラットな教師教育コミュニティの必要性
- S-STEPを飛び越えてスタート
- Self-Study of Teaching and Teacher Education Practices S-STTEP
- 実践と研究の往還の具体的な活動

7. これからの日本の教員の セルフスタディ研究と セルフスタディ実践。

2022年 セルフスタディのテキストの翻訳出版
セルフスタディの実践例の出版
キャッスルカンファレンスへの日本からの参加？

↓

？

日本のセルフスタディの状況と課題の現状把握から
「自分はどのように関わっていくか」を考える

